

# びわこの 考湖学

7

「輻湊」という熟語があります。七道の名についても。この言葉は「方々今にいたるまで、道路や鉄から集まってくる」とを意味しています。

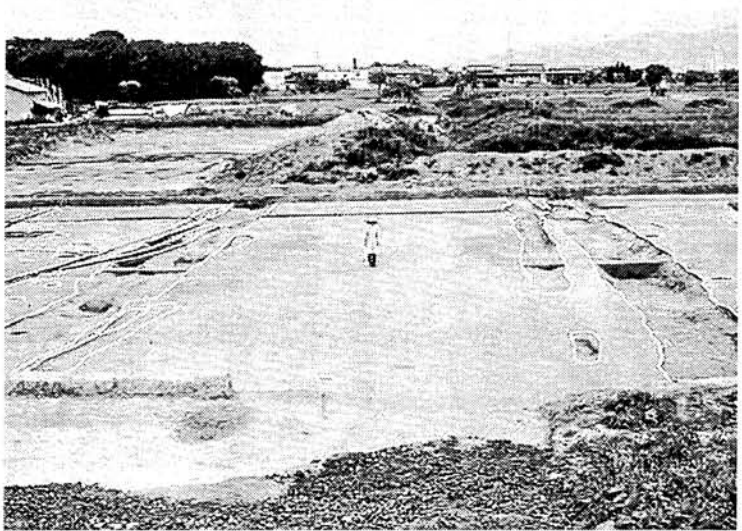
奈良時代や平安時代といった古代の日本には六十六国二島の地方行政単位があり、それらの国や島は五畿七道という行政の基本区分に属していました。

五畿とは大和国や山城国など現代でいえば首都圏にあたる畿内の5つの国。七道とは東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道のことです。現代では現代の高速道路に在の九州にあたる西海道を

除き、都から放射状に配置されています。たとえば東山道には、滋賀県である近江国から現在の山形・秋田県にあたる出羽国までの8国が属している

た。約16キロに駅家という施設が置かれました。駅家とは馬を乗り継ぐ施設

尼子西遺跡。東山道と考えられる幅12メートルの道路跡が出土した。中良町



れました。

駅家が設置されたことから、主要幹線道路を総称して「駅路」と呼んでいます。この駅路ですが、全国で発掘調査が進むと道幅がなんと12メートルや9メートルとかなり広い道であり、何にもわたり直線を通っていたことが明らかになったのです。

県内では甲良町の尼子西遺跡で、東山道と考えられる幅12メートルの道路跡が300メートル以上にわたってみつかりました。

近江国は、七道のうち東山道に属していたので、当然、東山道が通っています。東海道と北陸道も通っていました。東海道は、奈良時代には都がある大和国から伊賀国、伊勢国へと抜けるため、近江国内は通っていませんでしたが、都が

長岡京へ移ると、近江国を経て伊勢国へ抜ける路線へと変更されます。

このように近江国は、都と東国を結ぶ交通の要衝として古代以来重要な位置を占めていたのです。

奈良時代の有力貴族である藤原武智麻呂の伝記「武智麻呂伝」に、「近江国は宇宙に名有る地なり。地広く人衆くして、国富み家給る」と近江の豊かさを表現しています。

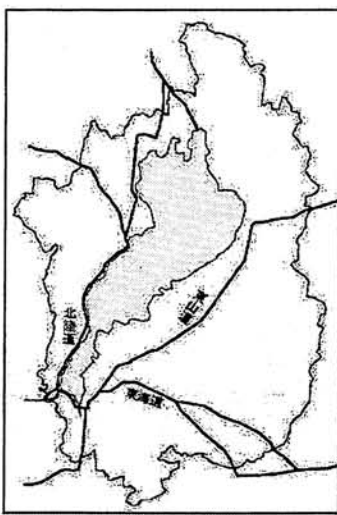
これは農業や製鉄などによる生産性の高さだけでなく、琵琶湖をとりまく交通路を介して人・物・情報が

を高めていったのです。輻湊の地、近江。交通路の要という地の利も、近江の豊かさの源のひとつにあげることができます。

(滋賀県文化財保護協会 内田保之)

## 古代の道路

で、緊急事態の時の早馬とよる都と地方間の連絡として使用されたり、公務に用いられていたのみ使われていた



近江の古代道路

# “ハイウェイ” 3本 近江を豊かに